

インド・ケーララと英国・エジンバラでの海外研修

商学部教授 石上悦朗

2014年9月7日から翌年9月6日まで長期海外研修員（3号研究員）としてインドと英国に滞在した。先にインドに3月末までの約7か月間、4月から5か月はエジンバラである。海外は1989年8月から1年間英国サセックス大学にて在外研究を経験しているので2度目の長期研修である。今回は「私費留学」であるが、研修の許可を得た後に申請した科研費が採択されインド調査に関しては十分な調査費を確保できる幸運に恵まれた（基盤研究C「インド在来型工業都市のビジネスネットワーク」H26-28）。

1. インド・ケーララ州トリヴァンドラム

9月7日夜、シンガポール経由で無事入国。トリヴァンドラム市（正式には Thiruvananthapuram）の開発研究所（Centre for Development Studies、CDS）に客員として着任した。ケーララ州はインド半島の南西端に位置しアラビア海に面しており、「海のシルクロード」の拠点としてスパイス貿易などにおいては重要な地域であった。また、クリスチャン人口が多いこと、健康・教育などの人間開発指標においてインドでは際立って優れていることも知られている。トリヴァンドラムは熱帯雨林気候（Am）と熱帯サバナ気候（Aw）のちょうど境界にあたる場所で11月から1月の比較的しのぎやすい時期を除けば年中暑く湿潤である。年内は単身でしばらくはホテル暮らしである。

CDSは1971年に著名な経済学者 K. N. ラージ教授によって設立された。爾来、研究所として規模は大きくないがこの研究者たちの活動は国際的に注目される成果を上げてきた。ケンブリッジからジョン・ロビンソン（1903-1983）やニコラス・カルドア（1908-1986）らの碩学が好んでCDSを訪問、滞在した。「ジョン・ロビンソンは質素なゲストハウスでの滞在に文句ひとつ言うことはなかった。彼

女の唯一の所望といえば毎朝フィルターで淹れたコーヒーだった」という話が今でも語られている。

CDSの建物はローリー・ベイカー（1917-2007）の設計であり、レンガを多用し通気性と自然採光を重視したエコノミーな建築は「建設費を大きく抑えその分、図書館の蔵書の充実に貢献した」という。近年、図書館（K. N. Raj ライブラリー）の増築が図られこの二つのフロアのみエアコンが入っている。スタッフの研究室、事務室等にもエアコンはない。建物で目立つのが6階建ての図書館である。螺旋状の階段を上り詰めると360度の展望が楽しめるスペースがある。ここはどこよりも風通しがよく、眼下に広がるココナツの樹が作り出す緑を見るのは最高の気分転換になるので良く上ったものだ。



CDS、図書館最上階からの眺望

私を受け入れ、何かとお世話いただいたのがスニル・マニ教授である。インドおよび途上国の技術発展研究で著名な教授とは20年来の交流がある。今回のCDS滞足を機にインドでは独立以来の伝統とそれなりのプレゼンスをもつ公共部門（国有企業、政府組織）の技術発展における意義に関する共同研究

を始めた。彼は私の研究室を彼の研究室の斜向かいに確保してくれた。

研究室は午後になるとかなり暑く感じる。どの部屋も天井扇をかなりつよく回している。これは蚊除けにもなるのだろうが、私はどうも天井扇のつよい風にはなじめないの、弱くしたりさらにはしょっちゅう机を移動したりと対応を試みていた。しかし、食堂でボリュームのあるランチ（基本の定食にヨーグルトと魚フライ/カレーで110円位）を食べ、午後睡魔が襲ってくる頃によく蚊に食われた。食堂は他の教員や事務スタッフ、院生とのよき交流の場であった。ケララとインドの政治経済および文化などについていろいろと教えてもらった。他方、彼らはTVや新聞、ウェブでの情報により日本の事情について驚くほどよく知っていたので鋭い質問をもらうこともあった。



都心部で帰路のバスを待つ人々



炎天下路上の魚売り

2. パンジャブ州ルディアーナーでの調査

「インドには三つのマンチェスターがある。北のルディアーナー、西のアフマダバードそして南のコインバトールである」とよく言われる。地場の繊維産業とこれを支える機械関連工業の発展が見られたというのがマンチェスターたる所以である。これらに地域の製造業の発展を企業家と産業団体の発展に関連付けて検討を試みるというのが本科研のテーマである。もとより個人で遂行するには大きすぎるテーマではあるが、別に進んでいる共同研究と連携することを念頭に置いている。当初の3年間はルディアーナーとコインバトール（予備調査）が主な対象である。

10月8日、空路デリーへ。11日早朝、ニューデリー駅から列車で4時間半、パンジャブ州ルディアーナー入り。当地にはそれまで3回、主にアジア経済研究所の研究プロジェクトの一環として小規模鉄鋼業と繊維産業の調査で訪問している*。

11月13日まで自転車組み立てメーカー、自転車部品メーカーおよびディーラーなどの自転車産業ビジネス関係者の面談調査、工場訪問さらに同州の企業・起業環境などについて調査などを行なった。また、終盤には、同市のやはり伝統的な産業である繊維・ニット・アパレルなどの、主に零細工場の訪問調査を行った。



自転車メーカーでのヒヤリングを終えて

* 拙稿「ルディアーナーの地場鉄鋼工場とビハーリー労働者」(『アジ研ワールド・トレンド』No. 212、2013年5月)

ルディアーナーでの調査から概略以下のような知見を得た。全国ブランドの自転車組み立てメーカー Hero Cycles, Avon Cycles などは概して新製品の導入、イノベーションなどに消極的である。その理由は長く国内市場が輸入代替工業化戦略の下で国内外、とくに海外からの競争から保護されてきたという数十年の経験を打ち破れないところにあると考えられる。部品メーカー（15社訪問）は商業ビジネスおよび職人カーストなどを出自とする企業家によって創業、経営されているが、彼らもまた同様に製造業の一員としては保守的である。そして、近年、中国製品の輸入による脅威が同産業でも高まる中、彼らが主として取り組んでいるのはいくつもある産業団体を通じた政府・政治家への陳情、彼らとの結びつきの強化であり、ビジネスライクな解決の方向とは異なる。これはパンジャブ州の企業家の在り方の特徴といえる。なお、同州の企業家についてはパンジャブ農業大学経営学科長 S. カプール教授と頻繁に意見交換を行い、有益な知見を得た。



コメの集荷場（ルディアーナー郊外）

訪問した工場の多くは密集した工場地区の中にあり、劣悪な道路事情と相まって、大気汚染の程度は尋常ではない。ここでの気分転換は少し郊外ののどかな田園地帯に出ることであった。「緑の革命」の本場では丁度大きなコンバインハーベスターによる収穫作業たけなわであった。ところどころで手作業による脱穀作業が見られたが、これは高級米バスマティを傷つけないための手作業だ。この作業に従事するのはパンジャブ人ではなく、貧しい州からの

移動労働者である。もう一つ大きな思い出になったのは北西へ車で3時間余り、パキスタンとの国境に近いアムリットサルにあるゴールデン・templ、シク教徒の総本山を訪問したことだ。

3. 再びトリヴァンドラムへ

11月14日鉄道にてデリーへ移動。翌日、共同研究者と市内を車で移動中にトラブルに遭った。「タイヤ・パンクチュア・ギャング」とは後で知った窃盗の手口であるが、後輪にパンクを仕掛けられて、後部座席にいた我われも車から降り目を離れたわずかな隙に荷物を盗むという手口である。私は1時間前に買った安物のキャリーバッグを盗られた。その後の警察への報告と対応を含め現地の共同研究者でもあるS先生には大変お世話になった。

私は16日には空路トリヴァンドラムに戻った。戻るとすぐに、話をつけていたアパートに入居するという大仕事が待っていた。

アパート探しは結構やっかいだった。このアパートはセキュリティがしっかりしており、清潔さ、風通しそれに景色がいいのでずっと目をつけていたが、唯一の大きな問題、「プロパンガスは自分で調達するように」という条件がネックになって二の足を踏んでいた。ガスは配給品の性格があるので、結構入手が難しい。プールもジムもあり高級そうなアパートなのにガスがない、これがインド事情の一端だ。入居後同じアパートの紳士がガスのシリンダーをかかえてエレベータに乗る姿を何度も見かけた。家主がようやくガスを準備してくれてほっとした。130平米のこの部屋の家賃は月2万ルピー（約4万円）、敷金3カ月分でデリーやムンバイなどの都会ではとても考えられない程安い。使用人用の小部屋があり、バスルームは大小3か所ある。寝室は二つ、うち一室にエアコンがつく。ただし、エアコンは排水管の装着が不適切で使用中に送風機から水が出てくるというしろものであった。

ホテル暮らしからようやくアパートで自炊ができるようになったら、最初に味噌ラーメンを作って食べようと決めていた。引越しの午後、粗末な鍋を買い、まず野菜を入れてガスの火をつけた。五階からの眺望は素晴らしい。住居が密集している地域だが、ココナツの樹高により家並みはほとんど見えず、緑

のじゅうたんがずーっとつづいているように見える。この景色を写真に収め、できた味噌ラーメンとともに SNS にアップしようと瞬間思いついた。デジカメを持ってバルコニーに出てパチリ……うん……えっ?!! 戸が開かない。重いスチール枠の戸はうんともすんとも開かない。自動ロックの戸から締め出されたのだ。それからの約20分はとても長く感じた。セキュリティの男性たちに大声で助けを求めた。そうして、野菜が焦げるにおいがしてきたとき、隣部屋のトイレの窓から決死の思いで入ってきた管理人助手の B さんが戸を開けてくれた。このいきなりの騒動を巻き起こしたことで、隣のタミル人のご家族（ご亭主は新興 IT 企業の経営者）とセキュリティの人たちとはその後親しくお付き合いできた。このトラブルを三谷幸喜氏なら楽しいドラマの挿話として使ってくれるかもしれない。

正月休み明けにインドは初めての妻が合流した。

この間、年末にはデリーで佐藤隆広神戸大学教授と JNU のスラバニ・ロイチョードリ先生が組織した日本人研究者の発表とインド側からのコメント、討論という場で発表する機会があった。東アジアとインドの産業発展の比較検討を行った。

‘Comparative study on the industrialization in India and East Asia: Discussion on a laggard in manufacturing,’ The Seventh Indo-Japanese Dialogue at Japan Foundation, New Delhi, December 23, 2014.

1 月には CDS でスタッフ、院生を前にしてこの発表をもう少し進めた（大手企業の投資活動と貿易構造の分析を入れた）議論を展開した。

‘Industrialization in Asia, A comparative analysis of the Indian and East Asian experiences’, CDS Seminar, Centre for Development Studies, Thiruvananthapuram, 23 January 2015.

また、2 月には元キャリア官僚にして企業家である旧知の C. バラさんの誘いで TiE ケーララ支部にて講演をすることになった。ケーララ最大の商工業都市コチンの起業に関心がある人たちにいわば日本側を代表して話すような機会であった。造園、水族館建設などのカバーしきれないトピックから私の守備範囲までいろんな関心の人々と 1 時間以上議論を交わした。

‘Emerging Strategic Partnership between Japan and

India & the Business Opportunities it throws up for MSMEs in India: a Japanese Researcher’s view’, TiE Kerala Monthly Meeting, Cochin, 26 February 2015.

コチン訪問は（年末年始に一度来ていた）、講演するかわりに当地の新興の企業家や経済誌編集者などと引き合わせてもらおうということをセットにしており、詳細は省くが、新しいビジネスのうねりとその対極のケーララのビジネス規制的政治体制などについて貴重な勉強の機会となった。コチンの後、ケーララの著名な避暑地であるムンナールに小旅行したことはいい思い出になった。トリヴァンドラム市内のコヴァラムビーチや大好きなコッラムのバックウォーターなどケーララの観光資源は実に豊かである。



ティープランテーションでの実習（ムンナールにて）

ここまで書いてきて、何をたべていたのか、アルコールはどうしていたか、などに関わるひょっとするとあるかもしれない関心、疑問には何も答えていないことに気付いた。

簡単に言うと食事はカレーが基本、アルコールは入手が容易ではなくほとんど毎日休肝日という優等生であった。現地で調達できる食材の制約からどうしても食事はカレー系になる。いつか惣菜（もちろんカレー）を買ったが、めちゃ辛いのと油濃いでこれは無理だと観念した。妻はいろいろとスパイスを使った料理に挑戦した。ある時、チキンカレーを来客のインド人に食べさせたらはっきりとまずい、水っぽいと言われたことがある。「チキンカレーに水を入れちゃいけないんだ」と。

「チキンカレー問題」はわが家ではその後も大問題であり、これが解決したのは次の訪問地エジンバラであった。ただし、手前味噌だがいずれもスパイスは私が調合したカレー粉である。

4. エジンバラにて

一時帰国をはさんで4月11日にエジンバラの地を踏んだ。寒い、というのが実感。じりじりと暑くなってきたケーララは最高気温35、6度、ここは7、8度である。

客員として所属したエジンバラ大学の School of Social and Political Science, Centre for South Asia Studies, Edinburgh India Institute（インド研究者は重複して名を連ねている）では私の専攻分野である経済学、産業発展論の研究者は比較的少なく、他方、社会学、人類学、歴史学などの分野で優れた仕事をしている人が多く、これらの分野について勉強するいい機会となった。

していただいた商学部と本学に感謝の意を表したい。この歳で家を長期に空けるというのは簡単ではなかった。遠方にいる娘たちはなにかと力を貸してくれた。また、妻の友人Kさんは毎週家の空気を入れ替えるだけでなく、身内でなければ依頼できないような事柄にも対応していただいた上、一時帰国、帰国時には食卓に野花を活け、冷蔵庫の電源を入れビールとつまみを用意してくださった。これら「女子会」の協力には本当に頭が下がる思いである。

そうそう、最後にやはり「チキンカレー問題」に一言すべきであろう。妻がエジンバラのパンジャープ・レストランのクッキング教室で習い、うやむやが氷解したことは、水は使っても使わなくてもよいという、多様性のインドをいとも象徴するような平凡な結論であった。要するに、カレーに、好みはあっても、王道はない、ということであろう。



エジンバラ国際ジャズ・ブルースフェスティバル

エジンバラは言わずと知れた歴史と学術文化の長い伝統をもつ地であり、戦後から今日に至るまでこれらを多彩なフェスティバル行事と高いレベルで結合してきた都市文化をもつ。エジンバラ大学もこの事業に積極的にかかわっている。

エジンバラにいてアフターファイブと週末がなんと充実していたことか。本稿はすでに紙数も尽きているのでここでの研究と暮らしについては別の機会に書きたいと思う。

あらためて本研修制度を通じて充実した時間を許



在外研究をふり返って～雑感

人文学部教授 伊藤 益代

1. はじめに

平成26年8月下旬より一年間、アメリカ合衆国のMIT言語学部とイギリスのケンブリッジ大学 理論・応用言語学部にて在外研究の機会に恵まれた。当初の予定ではMITに一年間腰を据えるつもりであったが、指導教授、兼共同研究者である教授が在外研究後半のうち二カ月MITに不在であるということで、それならばと、途中より、ケンブリッジ大学に研究先を移したのであった。

どのような研究生活であったのか、少しふり返ってみたい。

2. 研究について

研究課題である「統語的削除現象、および語用論的計算についての言語心理学研究」について腰を落ち着けて取り組めたのは、在外研究全体を通して、やはり一番うれしいことであった。日本では、どうしてもいろいろと中断せざるを得ない。

ということで、少し心を落ち着けてのスタートとなる。まずは研究テーマについての最近の動向を授業や勉強会、トーク（MITの大学院生や研究者のみならず、他大学などからの研究者による研究成果の公表。頻繁に開催される）などで身をもって感じるようになった。最初に気がついたのは、語用論研究の目覚ましい進展であった。大学院生や研究者による、語用論研究への探求心や関心の高さに少し驚きながら、リーディングの課題をこなすことを楽しみとした。その中で、研究テーマに密接に関連するある構文について、まだ研究が十分でないことに着目でき、新しい課題を設定できた。そして、それに一年をかけることとなる。在外研究中であるため、日本語の母語話者を参加者とする実験は断念した。しかし一方で、MITの研究環境が整っていたこともあり、英語を母語とする子供を対象とした実験は可能

となり、MITの学部生の協力を得て、データの一部を収集することができた。

さて、実際に実験が可能となったのは、MITのUROP（Undergraduate Research Opportunities Program）という制度のおかげである。これは、学部生（MITのみではなく近郊の大学の学部生も含む）がリサーチ・アシスタントとしてMITの大学院生、研究者、教授陣の研究の助けを一定時間行うことで、その時間が一定単位数に換算されるというものである。学部生にとっては、実際に行われている研究に直接関わったり、研究の様子を垣間見ることができたりといったメリットがある。私は、毎週火曜日夕方に開かれているラボ・ミーティングに参加していたが、そこで私と指導教授、兼共同研究者の研究のためにデータを収集してもよいという学部生を募り、承諾してくれた学生たち（MITの学部生二人）にデータ収集をお願いすることとなった。ちなみに、実際に実施する実験自体に私が実験者として参加しないのは、私が英語母語話者でないためである。保育園や幼稚園などの施設で英語を母語とする子供の文解釈のデータを収集する際に、実験者が英語母語話者でない場合は、実験結果に何らかの影響が及ぶ可能性がある。

ところで、参考までに、子供と実際に対応する実験者となる学部生はもちろん、研究者（実験に直接携わらなくとも）は、研究倫理、調査手法、注意・配慮などについて広範囲にまず訓練を受けなければ実験を開始することはできない。実際はオンラインにて指定コースを受け、それを済ませることが必要となる。ちなみに、平均20時間ぐらいかかる（私の場合は、もう少し短かった）ということだ。

その後、実験施設の都合により実験が順調に進行しなかったり、学部生の試験期間が予定の実験日と重なったりと、英国ケンブリッジ大学への到着は遅

れることとなったが、英国では収集済みデータとゆっくり、にらめっこをすることとなり、在外研究の取りまとめをすることに終始できた。

3. 生活について

ボストンには何度か訪問したことも、以前長期に滞在をしたこともあったが、2015年から2016年にかけての冬は寒さ自体も積雪量も記録的だった（らしい）。実際に正式に調べたわけではないが、MITの大学院生や教授陣、そしてテレビのニュース番組からの情報によるものであるが、どうもそうらしい。確かに、出発前年の冬は寒い冬であったことは日本でも報道されており、私も当時心配をしたのは覚えていた。しかし、ふたを開けてみると、記録的な厳冬の前年を上回る寒さとなったのであった。今となってははっきりとは記憶していないが、12月から3月までの数か月は雪が車道と歩道を除いたすべての場所にうず高く積まれていたし、その高さも腰以上の高さであることも大半であった。毎日ダウンコートと防水ブーツでだるまのような服装をしたし、また、大家さんが出かける私の頭に何か載せないといけないと、ある朝、ウールの帽子をかぶせたりもした。そして、寒さのあまりニコリとも笑うこともできない、そして頭がキンキンとなるくらいの厳しい寒さを長い間経験することとなった。実際、外出できない日もあったし、何日かは大学自体も閉鎖された。毎日零下10数度（摂氏）といった気温が普通であり、雪の降る日の方が、雪が降らない日よりも若干気温が高めであるということも、生まれて初めて知った。そういった理由で、ボストンについては、冬以降、春まで（4月になってもまだ雪の日があったが）、白かグレーの印象しか残っていない。

対照的に、名前は同じものの、もう一つのケンブリッジはただただ美しかった。（MITはマサチューセッツ州のケンブリッジにあり、ケンブリッジ大学はイギリスのケンブリッジにある。後者は、本家ケンブリッジとでも言うべきか…。）誤解のないように言っておくと、ボストンも夏や秋はもちろん美しい。ただ、ここでは、ボストンでの冬と、その後訪れた英国ケンブリッジ大学の春から初夏のころを比べている。（ボストンには申し訳ない。不公平な比較である。）

そう。おそらく一番美しい時期であったろう。大学やカレッジ、住宅街。手の行き届いた庭、木々、花など、緑に囲まれ、私もやっと戸外でも笑えるようになったと感じた。それくらい、ボストンは寒かったのだろう。福岡に比べたら英国ケンブリッジの気温は低めではあるが、太陽の光やまぶしさに体が緩む気がして、自分が春の虫であればそうであろうといったような幸せを感じた。冬のあいだ明らかに運動不足となり、体の中で何かが滞っている状態であると感じていたこともあり、毎日歩くことが楽しみとなった。実際、毎日いろいろなルートで歩き回り、時には遠出までする始末で、大学に行くのがメインなのか、そのあと帰宅時のウォーキングがメインなのかはっきりしない日さえあった。自転車ではスピードが速すぎ観察がいろいろできないこともあり、自転車は購入しないことにした。

2015年の夏はイギリスに滞在していたため真夏日というものを経験しなかった。在外研究の締めくくりをイギリスでとしたのはとてもよかったと思う。夏休みののんびりした雰囲気の中、アカデミックにも文化的にも豊かな環境のもと、野外でピクニックや日向ぼっこ、演劇、コンサートと夏を夜遅くまで満喫もしながら、長い1日を利用して、じっくりと研究の取りまとめにも専念できた。

4. おわりに

ふり返ると、研究面でも生活面でも非常に充実した1年であったことは間違いがない。ここでは深く触れないが、副産物として、（散歩に出かけてはマーケットで新鮮な食材を見つけ料理にいそしみ）料理の腕を上げることもできたと思う。その料理から得た活力のおかげで、ボストンは厳しい冬の寒さに耐えることができ、イギリスでは長時間の散歩（や遠くへの探検）を楽しめたのだろう。実に満喫した1年の研究生活であった、と遠い昔のこのように回顧しながら、じっくり研究に取り組めるあのような機会をいただけたことに感謝申し上げたい。